

漆塗り土器制作

漆を土器に塗る技法は、新潟県大武遺跡などの出土例から、縄文時代前期には確立していたようです(千葉2014)。宮崎県内でも古代の遺跡から見つかった土師器片や須恵器片などに、黒い塗料のようなものが表面に付いていることがあります。これらは報告書には「漆の可能性有り」、と記されていることもあります。私は漆といえば漆器しかイメージできず、土器に塗った場合どのような質感になるのか、疑問に思っていました。

そこで古代生活体験館の体験・実験講座「野焼きで土器づくり」で、焼き付け漆の技法で漆塗りの土器を実際に制作してみました。「焼き付け漆」とは、150℃以上の高温状態のモノに漆を塗布して瞬間的に漆を乾かせる技法で、「高温硬化法」とも呼ばれています。

今回、実験に使用したのはチューブ入りの国産生漆(約40g)、塗布用具は先端をほぐした縄です。漆を縄の先端に付け、焚き火から取り出した土器に塗布する、という手順で行いました。

火から出した直後の土器を、耐熱レンガの上に横に倒して置き、土器の表面を撫でるように漆を塗って見ましたが、漆液は器面に染み込まず、弾かれてしまいます。そこで縄の先を土器の表面に押しつけるようにすると、ブアッと激しく水蒸気が上がり、生木が焼けるような臭いがしました。漆が一瞬で沸騰し、乾いたようです。何回か塗り重ねていくと、器面は光沢のある黒色になりました。また、漆液が厚く掛かった箇所は漆が収縮し、焦げついたようになりました。一度塗りしか出来なかった底部付近は黒色が薄く、土器の色が透けて見え、縄で撫でた跡が目立ちます。だんだん土器の温度が下がっていくと、漆を塗っても黒く変化せず、褐色のままとなりました。



実験から1週間後、褐色だった漆も乾き、黒っぽくなりましたが、焼き付け漆と比べると分厚く、マットな仕上がりです。また、漆を入れた土師質の皿(パレット)は、漆が付いた箇所は、胎土に漆が染み込んだように見えるくらい薄い茶色で、縄のクズと漆が混ざった部分や、器面の凹みに漆が溜まった箇所は黒くみえます。塗りの技法や厚み、条件の違いにより、同じ漆でもこれだけ違った色調・質感になることがわかりました。

(谷口晴子)

参考文献：千葉敏朗 2014 「下宅部遺跡から見た縄文時代の漆工技術」『国立歴史民俗博物館研究報告 平成26年7月